33 テーマ別 部活動

標準問題

▲△▲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〈千葉改〉

五人一組で参加する俳句甲子園。加藤東子たちの俳句同好会は、二年生三人と一年生三人の六人。敗者復活戦で「草笛」という題を与えられた彼女たちは、一時間以内にチームとしての一句を提出しなければならない。

「友呼ぶ草笛は耳にやはらかし」

会長の須崎茜が自分の*披講を終わらせ、井野瑞穂を見る。打てば響くように瑞穂が続けた。

「草笛は空耳課題はかどらず」

一年生三人の披講は、誰が決めたわけでもないのに順番が一定になっている。桐生夏樹、北条真名、三田村理香。

今もその順に、テンポよく披講が行われた。

「海遠し青き匂ひの草の笛」

「草笛を鳴らせぬ子らの赤き頬」

「草笛や①十二音階定まらず」

みんな、自分らしい句を詠んでいる。夏樹は最近「の」の音を重ねるのに凝っていたし、真名は子どもを詠むのが好き、理香はきっと草笛でピアノみたいに演奏ができないことがもどかしかったのだろう。

そんなことを思いながらも、実は、東子は最初の句を読んだ時の、きっぱりとした茜の声が耳から離れない。

——友、か。

顔を上げると五人の目とぶつかる。そうだ、東子は六番目の会員だ。

東子は口を開いた。俳句甲子園への練習が本格的になってきてから、全く作句に参加してこなかった。自分に才能がないのはすぐに思い知らされたし、東子が作句したら選手、特に瑞穂が気にしそうだったから。でも、披講するならこの順番だろう。*スタメンではないけど会員であるマネージャー、いや副会長の東子。

「草笛や言葉にまとめられぬもの」

それまでノートに一心不乱に書きつけていた瑞穂がはっとしたように顔を上げた。その横の茜は、一瞬ぽかんとしてから、徐々に表情をほころばせる。

②魔法のようだ。

友呼ぶ草笛は耳にやはらかし。

草笛や言葉にまとめられぬもの。

茜と句をやり取りしただけで、ほかに何も話していないのに、気持ちが通じ合ったと思えた。

「言葉にまとめられぬもの、ですか」

夏樹がつぶやいたことで、茜も我に返ったようだ。ふっと息をついて会員を順に見ながら口を開いた。

「どう？　どの句が一番気になった？」

発言を促され、真名が言った。

「私、*トーコ先輩の句です。『言葉にまとめられぬもの』。草笛と言葉、その対比を思わせる感じが好きです」

東子はどきどきしてきた。きっと顔が赤くなっている。

東子の句を、いいと言ってくれた。創作で評価された。

だが、すぐに理香がこう発言したので、話は次に移った。

「私ね、誰の句っていうより、草笛に対して結構みんなネガティブだなあって、それが印象的だった。井野先輩の草笛は③、私の草笛も音階が不確かで不完全燃焼な気持ちについての句だし、真名にいたってははっきり『鳴らせぬ』

出題傾向

- 入試問題では、学校が舞台の小説が取り上げられることが多い。なかでも、部活動に励む同年代の少年少女たちを描いた作品は頻繁に登場する。
- 登場人物が、部活動にどのように向き合おうとしているかを読み取ろう。

だよ」

　夏樹が抗議する。

「仕方ないんじゃない？　だって、みんなでためしに草笛に挑戦してみたけど、誰一人吹けなかったんだから」

　この一年生トリオは強い。さっきの負けも引きずらない。東子はやっと肩の力が抜けるのを感じた。④小さく笑ってみる。と、瑞穂と目が合った。穏やかな表情で返してくれる。

「いいじゃない、それも草笛だよ。うまくいかない、あぶなっかしいもの。私たちの草笛の解釈はそういうことなんだよ。あ、あと会長が珍しく*破調で詠んでるのも面白かった。『草笛は耳にやわらかし』と『友』の取り合わせっていいと思う」

　それまで黙っていた茜が口を開いた。

「うん。『友』にはいろんな友があるよね。いろんなことを話してきた、たくさん話してもらってきた、それが『友』との言葉ならばきっとどんな言葉でも結局は耳にやわらかいんじゃないかって、そういうのも草笛に託したかった」

　茜の言葉を聞いているうちに、また胸がどきどきしてきた。茜はずっとみんなの顔を見回していて東子の方を一度も見ていないが、⑤この言葉も東子に向けられているのではないか。

　その東子の動悸は、続けて瑞穂が言ったことでさらにたかまった。

「そうだよね、私たち覚えていられないほどたくさんしゃべってきてるんだものね」

　――この人たち。

　その時茜の目が東子をまっすぐに見た。

　東子は何も言えずに、ただうなずいた。

　そう。たくさん話してきた。これからも。時には『言葉にまとめられぬもの』があっても。

〈森谷明子「春や春」より〉

（注）披講＝詩歌を読み上げること。
スタメン＝スターティングメンバーの略。
トーコ先輩＝東子のこと。
破調＝定型詩で音数に多少が生じること。

(1)　線「草笛」とは、どの季節の季語ですか。漢字一字で書きなさい。

(2)　線①「十二音階定まらず」とありますが、理香は、草笛に対するどのような気持ちを詠んだと言っていますか。文章中から十六字で抜き出しなさい。

(3)　線②「魔法のようだ。」とありますが、このとき東子の目に映った様子を、「句」「一変」という二つの言葉を使って、十五字以上二十字以内で書きなさい。

⬅問題は次ページに続きます。

(4) ［③］に当てはまる言葉として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　夢の中でしか聞くことができないし
イ　勉強の邪魔になるほどにうるさいし
ウ　友に語りかけるようにやわらかいし
エ　本当に聞こえているものじゃないし

［　　］

(5) ――線④「小さく笑ってみる。」とありますが、このときの東子の心の内について述べた次の文の［　　］A・Bに当てはまる言葉を、Aは一語、Bは「意見」という言葉を使って十字以上十三字以内で書きなさい。

▪自分の［A］が和らぐのを感じるとともに、［B］をほほえましく感じている。

B

A

10

(6) ――線⑤「この言葉も東子に向けられているのではないか」とありますが、東子がこのように感じた理由を述べたものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の句が、会長である茜の心に『言葉にまとめられぬ』ほど『やはらか』く響いているように感じたから。
イ　自分の句は、『友』を『言葉にまとめられぬ』ほど大切にする茜にとって物足りない点があると感じたから。
ウ　茜の句は、以前二人で一緒に聞いた『草笛』の心地良い響きや『やはらか』さを基にしていると感じたから。
エ　『言葉にまとめられぬ』思いを、茜が『草笛』に託した思いと重ねて説明してくれているように感じたから。

［　　］

(7) 文章中に描かれている東子の心情の変化を説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　他の会員に引け目を感じていたが、満足する句が詠めたことで、副会長としての自信と選手としての充実感を取り戻している。
イ　不安定だった仲間同士の関係が、作句と批評を通じて互いの本音を伝え合う中で安定しはじめたので、肩の荷をおろしている。
ウ　初めは遠慮があったが、自分の句が皆の心に響いているのを実感し、仲間が温かく受け止めてくれることを心強く感じている。
エ　マネージャーの仕事に徹してきたが、言葉の取り合わせが評価されたため、作句においてこそ存在感を示せると確信している。

［　　］

アドバイス

部活動の場面が描かれた作品では、顧問の先生と部員たちとの関係や、部員どうしの摩擦、目標とする大会などのイベントに向けて努力する姿、イベント当日の様子、その結果が引き起こした出来事などがテーマとなることが多い。

文化系の部活動としては、合唱部や吹奏楽部、美術部の他、調理部や将棋部など、さまざまなものがある。文章中の場面を押さえたら、部員それぞれの言動から性格やものの考え方をつかもう。また、顧問の先生の指導法や部活動への思いなど、主人公を取り巻く状況を把握して、登場人物の心情の動きなどを理解しよう。

発展問題

▲△▲　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。　〈兵庫〉

中学三年生になった桝井は、陸上部の主将として駅伝の県大会出場を目指していた。ところが指導歴の長い満田先生が加瀬中学校に転勤し、経験のない上原先生が顧問となった。予選大会に向け、他のメンバーであるジロー・渡部・設楽・大田・俊介が調子を上げる中、本来の力が出ない桝井は自分を5区にしてエントリー（参加申込み）することを提案し大会当日を迎えた。

おれがアンカーを走ることに決定したのは、今日の朝だ。

「そうそう、エントリー変更したんだ」

競技場につくと、上原が突然言い出した。

「やっぱり桝井君を6区にした」

「どうして」と①おれに、上原は「勝ちたいから」とあっさり言った。大会当日の朝、直前の変更だ。それなのに、衝撃を受けているのはおれだけのようで、みんなはすんなりと納得して、次の作業にかかっていた。

「おれ、貧血なんだ」

おれはテントを立て始めるみんなから離れて、上原に告げた。貧血という言葉を自分では使いたくなかったけど、上原に早く事情を理解して対応してもらわないといけない。

「そう言えばそんな感じだね」

「そんな感じだねって、わかってる？　ほら、*インターバルしたって三本目あたりから足が上がってないし、いつも1キロあたりから速度が落ちてるだろう」

きっと上原は事態の重要さがわかっていない。情でおれを最終走者にしようとしているのだ。でも、②勝つためにはそういうドラマはいらない。おれはわかりやすく説明した。

「とにかく最後に力が出ない。一番大事な最後がどうしようもないんだ。最後はどうしたって競り合いになる。そこで勝てる力がない」

「で？」

上原は首をかしげて見せた。

「でって、おれには6区を務める力がないってこと」

「だから何なの？」

「だから何って、ちゃんとチームのこと考えてよ。ここまでやってきたんだ。おれは6区じゃなくてもいい。みんなで県大会に行くことが大事なんだ。おれが格好つけるためにすべてを台無しにするわけにはいかない」

「なるほどね。桝井君、さわやかでかっこいいと思うよ」

上原は黙って聞いていたかと思うと、何の脈絡もないことを言い出した。

「なんだよそれ」

「桝井君さ、③自分の深さ三センチのところで勝負してるんだよ。だから、さわやかに見える。それだけしか開放しないで、生きていけるわけないのにね」

「それが駅伝と何の関係があるんだよ」

もうすぐ本番だというのに、どうして上原はこんなことを話しているんだ。あまりに無関係な話に、おれはいらいらした。

「駅伝も一緒だよ。桝井君はチームのみんなに慕われてるし、桝井君もみんなのことちゃんと把握してる。みんなの走りも性格も状態もきちんとつかんでる。だけどさ」

上原はおれの顔をじっと見た。

「だけど？」

「だけど、桝井君は誰のこともわかってない。誰も桝井君に伝えられないんだよ。みんな一目置いてるからね。桝井君、本当にみんなに一目置かれちゃってるんだよ」

「だから何なんだよ」

走る直前に、上原はどうしてこんなことを言っているのだ。④おれは完全にうろたえていた。

「中学校のスポーツは技術以上に学ぶものがあるっていうの、今までぴんと来なかった。だけど、今はわかるんだ。桝井君がいろいろ見せてくれたからだよ」

上原はおれに微笑(ほほえ)んだ。

「走れなくてもいい。私が、ううん、私たちが望んでるのはそんなことじゃないから。でも、6区を走るのは桝井君だよ」

トラックは残り半分。幾多西中はおれと肩を並べたままついてくる。こいつに譲るわけにはいかない。もちろん、満田先生が顧問だからって、すぐ目の前にいる加瀬中にも渡せない。負けちゃいけない。最後までジローみたいに楽しむんだ。頭の中では渡部が吹く*カヴァレリア何とかが響いている。

残り100メートル。酸素はどこにも回っていない。足も腕も身体(からだ)中が痛い。心臓も尋常じゃなく高鳴っている。おれの肩にある襷(たすき)は重い。設楽から大田へ、大田からジローへ、ジローから渡部へ、渡部から俊介へ。そしておれへと繋(つな)がれた襷。走っている時は一人だ。でも、おれを進ませているのは、おれだけじゃない。おれは設楽みたいに死にもの狂いで走った。大田のようにすべてをむき出しにしてくらいついた。

ゴールは目の前。信用して。俊介に伝えた言葉を唱えてみる。俊介がずっと見ていてくれた勢いのあるおれの走り。その走りをするんだ。ちぎれそうな身体だって、おれの走りをするんだ。おれは身体をとにかく前へ前へと押し出した。一歩分、たった一歩分、幾多西中よりおれは前に飛び出た。

いける。このまま走りきるんだ。今日で終わりにはしない。アンカーは最終走者なんかじゃない。絶対に繋いでみせる。おれをみんなを次の場所へと。

〈瀬尾(せお)まいこ「あと少し、もう少し」より〉

(注) インターバル＝ここでは、陸上競技の練習方法の一つ。
カヴァレリア何とか＝吹奏楽部員でもある渡部がよく吹いていた、カヴァレリア・ルスティカーナ間奏曲。

(1) ① に当てはまる言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　舌をまく　　イ　目を丸くする
ウ　鼻にかける　　エ　歯をくいしばる

(2) ―線②「勝つためにはそういうドラマはいらない」とありますが、桝井はどういうことを「ドラマ」だと捉えているのですか。それについて説明した次の文の［　　］A・Bに当てはまる言葉を、Aは五字、Bは十字以上十五字以内で文章中からそれぞれ抜き出しなさい。

▪おれが［A］ための場面となるように、［B］とすること。

A

B

(3) ―線③「自分の深さ三センチのところで勝負してるんだよ」とありますが、この上原先生の言葉は、桝井のどのような姿を言い表したものですか。それについて説明した次の文の［　　］A・Bに当てはまる言葉を、文章中からそれぞれ五字以上十字以内で抜き出しなさい。

▪言いたくなかった貧血という事実を打ち明けてでも、［A］ためには、最後の競り合いで他のチームに［B］自分は6区を譲るべきだと主張することで、さわやかでかっこいい自分を演じてしまっている姿。

A

B

(4)　線④「おれは完全にうろたえていた。」とありますが、このときの桝井の様子を説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分がみんなから孤立していると指摘され、気が動転している。
イ　自分がみんなに尊敬されていると指摘され、照れている。
ウ　みんなが自分を敬遠していると指摘され、思い悩んでいる。
エ　みんなが自分に遠慮していると指摘され、驚き戸惑っている。

(5)　この文章における、上原先生の言動について説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　桝井の真剣な反論に動揺しながらも平静をよそおい、あえて桝井の弱点を突きつけることで気持ちを奮い立たせて、主将としての責任を果たしてほしいと頼んでいる。
イ　桝井の告白をわざと受け流し、胸のうちを語るように仕向けたうえで、桝井自身が気づいていない限界を示し、その限界を自分の力で乗り越えてほしいと願っている。
ウ　桝井の弱音を意外に思い、自信を失ってしまっていることが心配になり、とりとめのない話をしながら桝井の緊張を和らげ、実力を発揮してほしいと望んでいる。
エ　桝井の駅伝にかける熱い思いに共感しつつも、話題を変えて桝井に冷静さを取り戻させたうえで、これまでの努力をたたえ、有終の美を飾ってほしいと祈っている。

(6)　線「トラックは残り半分。」以降における、桝井の心情の説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　体調の悪さをおして懸命に走る中で、みんなの信頼を得ることができたと実感し、さらに慕われる存在になりたいと感じている。
イ　全力を振り絞って走る中で、能力以上の走りができていることを実感し、県大会に向けてさらに技術面を磨いていこうと考えている。
ウ　自分をさらけ出して走る中で、駅伝にかけるみんなの思いに後押しされていると実感し、その繋がりを手放したくないと感じている。
エ　みんなの姿を思い浮かべながら走る中で、落ち着いた走りができていることを実感し、この教訓をみんなと共有したいと考えている。

アドバイス

運動系の部活動では、ここで取り上げた陸上部の他、野球部、サッカー部、テニス部、水泳部などがよく舞台となる。学校内の部活動ではないが、フィギュアスケートや水泳の飛び込み、自転車といった競技が扱われることもある。

運動系の部活動の場合、「個人競技」と「団体競技」で傾向が異なる。個人競技では、一人の選手と、その選手を取り巻く人物たち（指導者や家族、ライバルなど）とのやりとりが多い。団体競技では、同じ競技に取り組む部員どうしのエピソードが中心になりやすい。同じ陸上部でも、短距離走と、リレーや駅伝では、登場人物の関係や主題が異なる場合があることに注意しよう。

内容としては、怪我（けが）などによる苦悩と葛藤（かっとう）、メンバー内に生じたもめごと、部員どうしで助け合う姿がテーマになっているものが多い。主人公のおかれた立場、周りの仲間や指導者との関わりを捉え、出来事を通して何に気づき、どのように問題と向き合ったか（解決していったか）を、心情の変化と合わせて理解しよう。